

ミャンマースタディーツアーを終えて

関西学院大学経済学部 4年

瀧川奏子

ミャンマーでは、1人1人の「村のため、家族のため」と強く思う気持ちが、道直しへ繋がっているのではないか。

2週間のスタディーツアーで、最も感じたことです。

「技術進歩は遅かったが、世界一仏教の教えを良く知っている。だからこの国は平和なんだ。」と村人が自負していた通り、日常のあらゆる場面における利他の気持ちの根底には、仏教の教えがあると感じました。

手と手を合わせて深々と祈る姿。純粹にお坊さんを尊敬する姿。これはミャンマーどこに行っても見受けられるものでした。日本とは異なる、国民全体の信仰心に衝撃を受けました。

あっという間に過ぎた2週間は、小中学校・孤児院訪問や、お寺・バガン遺跡・チャイティーヨー観光などたくさんの学びの連続でした。



カンター村の小学校 かぶとの折り紙を手にとって喜ぶ生徒たち



シュエダゴンバゴダ



チャイティーヨー



バガン遺跡



その中の、1年目の事業地であるカンター村の道の視察と、シンガー村で参加した道直し。この2つの道で感じたことを、以下綴ります。

ピャボンから小舟に揺られて1時間。カンター村に着きました。のどかな景色と綺麗な道が続く美しい村でした。



道直しの成果として、病院建設が叶ったこと。新たにバイクタクシービジネスが生まれたこと。都市とのアクセスが便利になったため、村人は新築の家を建てられたこと。完成

した道を歩くだけでも、様々な恩恵を目の当たりにしました。

しかし、道直しによって弊害も生じていることに驚きました。バイクや自転車の交通量が増し、交通事故の危険性が高まったことです。

道直しをしても、そこで全てハッピーエンドではないことを痛感しました。道直しに限らず、どんな支援の先にも、村人の生活や心情を、共有すること、先の先を見通すことがどれほど大事かわかりました。

一方、まだ道直し開始から 2 ヶ月目のシンガー村。少数民族カレン族が住む村。そしてミャンマーでは珍しいイスラム教徒と仏教徒が融合して生活している村です。

シンガー村での道直しは、スタディーツアーで最も印象に残っています。

イスラム教の村人たちとお互いが緊張状態の中、始まりました。学校に行けない子供達も多くいて、彼らは私たちを珍しそうにじっと見ているだけでした。

いよいよ、土を敷いてコンパクションをする作業が始まりました。果てしない地道な作業です。

energy! energy! と村人から励まされた三年前のケニアを思い出しました。これはリベンジだ、と自分を奮い立たせました。

言葉は通じなくても、同じ時間と同じ作業を共有するうちに、自然と状況が変わっていました。

パワフルなお母さんたちと少年たちと、コンパクションをしながら 1! 2! 3! と励まし合いました。

雨季になると、大人の胸の高さまで雨が降る写真が、脳裏に浮かびました。

この道が完成したら、今日共に作業をした少年たちが学校に行けるだろうか。彼らの生活に変化が起こるだろうか。そんなことを思いながら、作業をした 1 日はあっという間でした。





ミャンマーの子供達には、ケニアと同じく、悲壮感なんてちっともありません。力強く生きるパワーを感じました。そして何よりも、お坊さんや仏教の教えによって、とても優しく素直な心を持っていました。

しかし、そうは言うものの改善すべき問題も見えました。最終日に訪れた CLC 孤児院には 100 人以上の孤児がいました。

台風で両親を亡くした子供達。今でも続く内戦によって親元を離れてしまった子供達。このような子供達がたくさんいることもミャンマーの現状です。



軍政から民主化となり、海外資本が次々と投入され、明るいニュースが続くミャンマーの裏側にはこのような現状もあることがわかりました。

私にはこの現状を変える力はありませんが、知ること・考えること・共有することはできます。帰国しても、この経験を忘れずに生活していきたいです。

最後に、4月から社会人になる私の決意を記そうと思います。

1点目<メイドインジャパンで世界を幸せにできる可能性>

インタビューした全てのミャンマーの方々は「日本＝技術大国」「日本製は1番」と見なしていました。街中には、日本の中古車が溢れていました。

部品メーカーに勤務する者として、日本の強みである技術力の現場に身を置くことになります。メイドインジャパンが世界から信頼され続けるために、覚悟を持って働こうと思います。また世界の多数派である開発の途上国に目を向け、日本の技術力を通じて共に発展し合えるビジネスマンになりたいです。この夢を心に留めながら、4月から頑張ろうと決意します。

2点目<真のおもてなしとは何か>

チョンチャイ村の村長ウイントンとその家族との出会いが忘れられません。美味しいご

馳走と温かい歓迎に感動しました。

日本のおもてなしは注目を浴びていますが、それ以上の温かさがあったと感じています。社会人になって、自分のことで精一杯になり周りが見えなくなった時、彼らのおもてなしと、ゆったり時が流れるチョンチャイ村を思い出そうと思います。そして一度立ち止まり、大切なことを忘れないようにしようと思いました。



ウイントン一家